

現代短歌論評

日本浪漫学会主筆

河内裕二

令和短歌の分析と解説

現代短歌論評

日本浪漫学会主筆 河内裕二

短歌文化の継承のために

はじめに

短歌ほど日本人の心を伝えるジャンルはない。千二百年以上も前の『万葉集』に収められた多くの歌は、現在も色あせるどころか眩しいほどの輝きを放ち、われわれの心を打つ。美しく表現豊かな日本語を駆使して、三十一文字に思いを込める。この短歌文化がさらに千年先まで続くかどうかは、単に作歌の習慣が続くかではなく、この先ずっと優れた歌を生み出して残してゆけるかどうかにかかっている。必要なのは作歌と批評なのである。

筆者は日本浪漫学会で日本文化の研究として短歌研究を担当している。本評論集は、日本浪漫学会が継続的に歌会を催した成果を元に、これを分析し、解説したものである。

三十一文字に込められた作者の意図や思いを自ら読み解くと共に、疑問点については作者本人に伺う形で作品理解を深め、先人の歌との比較や語彙や修辞の考察などにより作品を多面的に分析し、作品世界を解説している。これが創作コースの諸君に日本の伝統の一つである浪漫主義短歌を自らも作る形で学ぶ一助となれば幸いである。

令和四年九月十日

日本浪漫学会主筆 河内裕二

目次

一	春を待ちながら	5
二	花の香りの包まれて	10
三	穀雨降る頃	16
四	新緑に心和み	22
五	空に向かって	28
六	様々な別れ	32
七	秋の訪れ	36
八	優しきまなざし	40
九	コロナ禍で迎える新年	44
十	雪が雨へと変わる頃	50
十一	梅の花咲き散る	55
十二	先の見えない世界に	61
十三	桜の花もうつろひて	65
十四	思ひ出はいつも鮮やか	69
	参考文献	73

一 春を待ちながら

お水取り越えねば春は来ぬといふ

母の冬里思へば幾歳 成秋

「お水取り」とあるので「冬里」は奈良だと判断できるが、作者の濱野成秋先生のお母様は奈良のご出身。「お水取りが済むまでは春は来ない」とよく仰っていたそうで、奈良は盆地で冬はしんと冷えると伺って冬の奈良を知らない筆者も納得。「古里」や「故郷」では寒さは伝わらない。

「思へば幾歳」と、お母様の出身地に対しても長い間欠礼していて申し訳ないと思えるのはお母様への深い愛ゆえ。中村憲吉の歌と比べたい。

時雨して奈良はさむけれ御水取

なほ二月堂に行を終らざる 憲吉

同じくお水取りが終わらないと春は来ないと言っているが、母への思いが込められいなのがさみしい。濱野先生の作と比べると写実的である。

濱野成秋の母の冬里は、久米仙人の話で有名な久米であり、奈良県でも大昔からの人里であるのでゆかしい。

初春に涙腺ゆるむ孫の書く

はねだしそうな「新たな決意」 由良子

お孫さんのお習字を見たときに、その伸びやかな字を見て思わず涙が出たそうで、作者の由良子さんは「最近はこのことで涙腺が」と仰る。お幸せな証拠である。元気に育つ孫とそれ温かく見守る祖母。温かい気持ちになる。「はねだしそうな」の言葉遣いが秀逸である。

「歩いてる？」娘に訊かれ生返事

愛犬逝きて運動不足 光枝

娘さんに尋ねられ生返事でごまかす様子は微笑ましいが、その分愛犬を亡くした寂しさも伝わってくる。昨年愛犬が亡くなるまでは犬の散歩が日課だったとのこと。毎日時間になると、散歩を待ちきれない愛犬に催促される。そんな光景も目に浮かんでくる。

若山牧水にも次のような歌がある。

枯草にわが寝て居ればあそばむと

来て顔のぞき眼をのぞく犬 牧水

筆者は犬を飼っていないが、飼っている人を見ると犬の方が主導権を握っているように思えてしまう。

アネモネは信仰の花 花言葉

「信じ従ふ」ラジオより聞く 尚道

作者の尚道さんの話では、聖書には「野の花を見よ」という言葉が出てくるが、この花はアネモネだと言われている。毎日その日の花と花言葉を紹介するラジオ番組があり、アネモネの日があったことで生まれた歌。クリスチャンの作者ならではの一首。調べてみると、赤いアネモネはキリストの受難を象徴するようだ。ギリシア神話ではアフロディテの愛したアドニスの血がアネモネに変わったとされる。筆者はこの歌に散文的な印象を受けた。

西の空父母の顔あり悔ゆるのみ

八十路往く身に老いのしかかる 艶子

人生を振り返り、今になって両親の存在が大きかったことを痛感し、感謝の気持ちとともっと親孝行をしておけばよかったと悔やむ気持ちになられているのだろう。

作者は三崎の入船ご出身で由良子さんとは幼なじみ。由良子さんのお話では作者のお父様は県会議員をされていてお母様も旦那様を支えながら一生懸命働いておられたから、その姿を思い出されるのではないかとのこと。

「西の空」とは西方浄土のことであろう。浄土が西にあるとされたのは、太陽も月も最後は西に沈むのですべてのものが最後は西に帰するとされたとする説が有力である。美しい夕日が沈むのを見れば誰でもその先に浄土があると思うのではないか。

冬夕焼赤く染めたる故郷の

夕べの雲はどこへ向かふや 裕二

筆者の歌。歌に詠まれている場所について質問を受けた。作者はどこに
いるのか。故郷に戻って詠んでいるのか。故郷を思って詠んでいるのか。
また夕焼けも同様で、故郷の夕焼けか、今住んでいる場所の夕焼けか。両
方の解釈ができる。

「ふるさととは遠きにありて思ふもの」で始まる室生犀星の詩の「詠んだ
のは故郷か否か」問題が一瞬頭をよぎったが、著者としては、読者がどち
らにでも解釈できるように意図して書いた。とくに夕日や夕焼けは、人そ
れぞれが自分のイメージを持っている。現在筆者の住んでいる東京で見る
夕焼けはオレンジ色だが、三浦に住む方は真っ赤だと仰る。「夕焼け小焼け」
の歌は八王子の恩方の情景だったが、もはやそこでは見られない。濱野先
生は、最近三浦で沈む夕日を見て、ここではまだ「夕焼け小焼け」の歌の

夕焼けが見られると思ったとのこと。三浦在住の方によると諸磯湾に沈む夕日が最高に美しいそうだ。

冬の夕焼けを表す言葉には「冬夕焼」「寒夕焼」「冬茜」「寒茜」がある。初句は「冬夕焼」と「冬茜」で迷い、当初は音の並びですっきり聞こえる「冬茜」を考えていた。「あかね」と言えば万葉集の額田王の有名な一首がある。

あかねさす紫野行き標野行き

野守は見ずや君が袖振る 額田王

この歌は月光の中という解釈があり「あかね」が夕焼けを表さない場合もあると伺った。「冬茜」という語があまり使用されないために意味が分かりにくいことも考慮して「冬夕焼」とした。

愛すれど猫は巧みに家を出で

畑や山をグルグル回る 良江

猫がすきを見て時々逃げ出すので、作者はそのたびに探し回り、猫に振り回されている。先日五時間探された。

「畑や山をグルグル回る」というどこかコミカルな後半部分が、飼い主になど全くお構いなしに自由奔放に行動する猫の特性と何となく人を馬鹿にしているような印象を上手く表現している。憎たらしいけど猫好きにはそれがたまらないのだろう。

いにしえの塚の遺れる丘に立ち

時の動きを中宙に視ゆ 弘子

作者は三浦の見晴らしの良い丘の上に畑をお借りになっていて、近くに十三塚がある。人から聞いた話では、十三塚は三浦道寸の十三人の家臣の塚で、彼らは新井城が燃えているのを見ながらそこで亡くなったとのこと。一五一六年に落城。北条に敗れ三浦氏は滅ぶ。

作者が塚のある丘から見た空はとても美しかった。自刃した家臣たちが見た空もきつと美しかったのだろう。空は変わらないが時は変わると感じお詠みになったのがこの一首。

” 推し “ などと粹な言葉を使われて

吾人はたじろぎ若者を見る 和子

第一六四回芥川賞の受賞作である宇佐美りん『推し、燃ゆ』（二〇二〇）を踏まえて詠まれた歌。

現在、宇佐美氏は大学生で二一歳。作者は九一歳と伺ったので、年齢差だけを見れば大きい。「推し」という言葉は、若者が使う場合「応援しているアイドル」といった意味で使われることが多く、かなり意味が拡大されているが、逆に「一推しアイドル」が略されて「推し」になったと考えたほうが適切かもしれない。「推し」は辞書的には「二推し」の意味なので、使われても「たじろぐ」ほどではないだろう。

『推し、燃ゆ』のタイトルで言えば、「推し」よりも「燃ゆ」の方がわかりにくい気がする。「燃ゆ」とはネットで炎上すること。「推し “ など ” と “ など ” が付いているので、あるいは「推し、燃ゆ」という言葉にだじろがれたのだろうか。

『推し、燃ゆ』の主人公は、好きなアイドルの応援に心血を注ぐ女子高生だそう。同じ「燃ゆ」でも牧水に次のような歌がある。

真昼日のひかり青きに燃えさかる

炎か哀しわが若き燃ゆ 牧水

二 花の香りの包まれて

コロナ禍で自粛の日々も桜咲き

鶯鳴きて暫しの癒し 光枝

作者は自然豊かな場所にお住まいで、この時期にはご自宅の側に咲く桜の花を眺めていると鶯の鳴き声が聞こえてくると仰る。コロナ禍で自粛が求められる生活に変わってしまったても、自然の営みはいつもと変わらない。春になれば木々は芽吹き、鳥はさえずる。身近にある自然の美しさに癒やされ、安らぎを得ましょう。本作はコロナ禍でどこか窮屈で落ち着きを失った社会に対しての作者のメッセージだろう。

鳥の中でも鳴き声が美しく印象的なのはやはり鶯である。容姿はメジロの方が「うぐいす色」で、鶯は緑よりもむしろ茶色っぽく、鑑賞するならメジロ、声を聴くなら鶯だろう。メジロについて濱野先生より興味深い話を伺った。「メジロ取り」という東京青梅市で聞いた慣習である。「メジロを取らせてください」と言って他人の庭に入って行くと、その家の奥様がどうぞどうぞと縁側に招き入れ、お茶が振る舞われる。しばし待っていると妙齢なお嬢さんが出てきて挨拶をする。実はこれは結婚の聞き合わせで、メジロ取りに扮して言うと言相手もそれを心得ていて応対する。梅で有名な青梅市ならではの慣習である。

梅の花にはどこか可愛らしさがある。「梅」といえば確かに「メジロ」が似合う。「桜」にはどんな鳥が似合うのか。「桜」と「鶯」というのであれば、在原業平の次の歌がある。

世の中に絶えて桜のなかりせば

春の心はのどけからまし 在原業平

この業平の有名な桜の歌を良寛が本歌取。

鶯のたえてこの世になかりせば

春の心はいかにあらし 良寛

潮風とお湯の温度が絶妙と

露天に入る桜と共に 由良子

海を望む露天風呂には桜の花びらが浮かび、潮風で温度は絶妙。そこま
で言われてしまうと誰もが今すぐ行きたくなる。作者は油壺の温泉ホテル
に行つて露天風呂を楽しんだ。春とは名ばかりで外は寒くお湯は熱い。目
の前の桜の大木は散り始め、前方に海を見ながら入る露天は最高で、その
実体験を詠んだ歌である。

春は惜し^{みまか}薨る師の影時移り

桜吹雪の日和も疎まし 成秋

この春に敬愛する二人の恩師と小学校のクラスメートを亡くされた濱野
成秋先生がお詠みになった歌。春とって思い出されるのは西行法師の歌
で、同じ死ぬなら花が咲いているその下で自分は死にたいと西行法師は言
うが、いくら春でも大切な方がこんなに多く一度に亡くなられてはたまら
ない。春が散らすのは桜の花だけではないのだ、としんみり仰る。

願はくは花の下にて春死なむ

そのきさらぎの望月のころ 西行

先生との良き思い出の時が移り師の薨る姿に手を合わせなくてはならない日が来た。それも春に。薨る人がこんなに多いと桜の花を見てもよい日和だなんて思えない。

「みまかる」は「身罷る」の漢字表記が普通だが、「夢」の下の部分に「死」と書いても「みまかる」となる。調べてみると、「薨去」という言葉があり、皇族などが亡くなった際に使われる。「身罷る」ではなく「薨る」。濱野先生がいかに恩師を敬愛されていたのが漢字一字で表現される。

病む友の恢復願ひ宮参り

梅の匂ひのけふは柔らか 裕二

知人が病気で治療中と聞いて、一日も早く完治してもとの生活に戻って欲しいと願いお宮に参拝した。その時に筆者が詠んだ一首。病気がよくなるという意味では「快復」という漢字が使われるが、知人は行動的な人でいつも忙しくしていた。病気はもちろんその活動的な生活も元に戻って欲しいとの思いから「恢復」にした。

枇杷の花、梅の花へとくる野鳥

しばらく群れて直ぐに飛び立つ 良江

三浦は野鳥が多い。先日もとんびの行動が印象的だったと作者は仰る。ご自宅の近所の山にとんびが巣を作っていた大木があり、その木が伐り倒される際に作業員に向かってとんびが飛んできた。まるで伐採に抗議するかのようだった。山には小さいとんびも飛んでいたので、その木で生まれて巣立ったのかもしれない。なぜ木が切られたのかは伺わなかったが、巣を失ったとんびはどこへ行ったのか。

「しばらく群れて直ぐに飛び立つ」の部分はまったくその通りで、鳥というのは、いるのは一時で直ぐにいなくなる。よく俳句は写生と言われる

が、短歌も自然やものをよく見ることが基本である。写生歌といえど正岡子規の次のような一首がある。

瓶にさす藤の花ぶさみじかれば

たゝみの上にとどかざりけり 子規

何気ない客観描写のようだが、子規が晩年病床に伏していたことを知る者ならば、花をどこから見ているのかと視線の位置を考え、歌に描かれていない作者の姿さえ見えてくる。さらに描写自体がどこか彼の心の声のようにも思えてくる。優れた写生歌は多くのことを物語る。

あの人もこの人も「いい人ね」って

思える今日の元気な証^{しるし} 弘子

最近作者は、短歌は必ずしも古典的でなくてもよいのではないかと思われて、俵万智や若い歌人の自由な歌を見て、ご自身も「五・七・五・七・七」の定型に縛られない歌をお詠みになった。他人を良く思えない時は、自分の調子があり良くないと経験から感じておられて、そのご自身のバロメーターを歌にされた。誰でも自分のことを知るのは難しい。他人に対する気持ちから自分の状態を知る。たしかに自分の心に余裕がないと、人に対して優しくなれないものだ。

上田三四二の短歌論『短歌一生』に「心の色」と題する文章がある。上田三四二は謡曲「熊野^{ゆな}」で覚えた「思ひうちにあれば、色ほかにあらわる」という文句はまさに短歌に当てはまると述べている。短歌の技法とはこの内なる思いをどう形にあらわすかの工夫に他ならず、作品の高低は、作者のその時期における生き方の氣息に照応しているとす。「思ひうちにあれば、色ほかにあらわる」すなわち歌には心の色があらわれる。これほど明解な短歌論があるだろうか。紀貫之が『古今和歌集』「仮名序」に書いた「や

まと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」にも通づる。

本作は心の色がストレートに出ていて素晴らしい。

雨は降る舟よ動けと念じても

舟は繋がれ 白秋を恋う 和子

コロナ禍で外出できないご自身を舟に喩えられたのだろうか。作者のお住まいのホームはすぐ前が諸磯湾とのことなので、湾の船を見てお詠みになったのかもしれない。

白秋の作詞した『城ヶ島の雨』という歌がある。詩には「雨はふるふる」や「舟はゆくゆく」という言葉もあるので、その歌から白秋を思って詠まれたと想像される。調べてみると『城ヶ島の雨』は大正二年に三崎に住んでいた白秋が作った詩に「どんぐりころころ」などを手掛けた梁田貞が曲をつけた舟歌である。詩は当時の白秋の苦しい心境を表していると思うが、舟歌にしたのは自らの新たな船出を願ってのことではないか。現在城ヶ島大橋のたもとには白秋直筆の詩碑がある。

五十円大根二本求めると

傷ある大根一本おまけ 尚道

なんとも個性的な歌である。「五十円」「二本」「一本」と数詞が多く使われ、出てくる名詞は「大根」だけ。普通ならばただの説明になるところだが、これが歌になっているから不思議である。

今年は野菜が豊作なのにコロナの影響で需要が減り売れなくて農家は困っている。捨ててしまうくらいなら五十円でも売った方がよい。形が悪かったり傷ついたりしたものは出荷ができないからおまけで付けられているそう。三浦なので三浦大根だろうか。

大きくて美味しい大根が五十円とはなんとお得かと思う筆者は、この地では「よそ者」の証拠である。誰にとっても安いのはありがたいが、地元誇りの大根が投げ売りされていれば、どこか悲しく切ない気持ちになる。そうさせる社会に対しての疑問や怒りの感情も静かに湧いてくる。スーパーの広告文句のように淡々と述べられるとなおさらである。作者はそこまです計算している。

三 穀雨降る頃

ゆく春の橋の上なるおぼろ月

黄砂のせいとつれないラジオ 由良子

「おぼろ月」というと唱歌『朧月夜』を口ずさんでしまうのではないだろうか。『朧月夜』は作詞が高野辰之、作曲が岡野貞一で、このコンビは他にも『故郷』『春が来た』『春の小川』などの素晴らしい日本の歌を作っている。「白地に赤く日の丸染めて」で始まる『日の丸の旗』も彼らによるものである。作者も「菜の花畠に入り日薄れではないが」と『朧月夜』に言及され、ご自身が夜空に浮かぶ月を見て今日はおぼろ月だとロマンチックな気分になっていたら、ラジオで十年ぶりに関東でも黄砂が確認されたというニュースがあり、飛来した黄砂のせいで月が霞んでいたと知り少々興ざめされた。たしかにどこか不毛なイメージのする乾燥した砂漠の砂で霞むのと、霧や靄などの空気中の水分に包まれて霞むのとは「おぼろ月」も気分的に異なる。

おぼろに霞んだ月の美しさに日本人はずっと魅せられてきた。『新古今和歌集』にも朧月夜の歌がある。

照りもせず曇りも果てぬ春の夜の

朧月夜にしくものぞなき 大江千里

この柔らかな光の感じを好むからこそ日本家屋では障子が使われるのではないだろうか。谷崎潤一郎の随筆に『陰翳礼讃』というのがあるが、日本人はあまりキラキラ明るいのを好まない。陰影の中で映えるものを美しいと思うのである。

満人の近くの店から漂へる

食欲そそる中華の匂ひ 光枝

何気ない日常を詠った一首。作者のご自宅の近所には中華料理屋があり、お昼時に美味しそうな中華料理の匂いが時々風に乗ってやって来る。

初句の「満人の」によって歌のイメージが膨らむ。お店をされているのは中国の方だそうだが、東北部の満州出身かどうかは不明とのこと。そこをあえて満州出身とすることで彼らに対して興味を抱かせる。満州というと満鉄や満州国さらに終戦後に命がけで日本に引き上げてきた引揚者のことなどが頭をよぎる。ある時はロマン、またある時は悪夢。日本人にとって「満州」は中国の他の地名にはない特別な意味合いを持っている。

「雪の降る夜は楽しいペチカ」という歌詞で始まる作詞北原白秋、作曲山田耕筈の『ペチカ』という童謡がある。筆者はずっとロシアについての歌だと思っていた。ペチカとはロシアの暖炉のことだからである。しかしこの歌はもとと一九二四年に発行された『満州唱歌集』に収められた唱歌で、当時の満州を舞台にしている。歌を依頼された白秋と耕筈の二人は満州まで行って制作した。

病超へ遂げし娘の記録見て

揺れる母御の心測れり 和子

白血病を克服し日本選手権で優勝を果たした水泳選手の池江璃花子さんの話を聞いて詠まれた。池江さんご本人ではなく彼女のお母様の心境を歌われたのは、作者ご自身がいつも母親としてお子さんのことを心配しているからで、お子さんが重い病気になった池江さんのお母様の気持ちを考えずにはいられないのである。

「今の若いお母さんは気持ちが強くて娘を絶対に勝たせてあげたいと思うかもしれないが、自分などは水泳が続けられなくてもオリンピックに出られなくても体を大事にしてただ元気でいてくれたらそれでよいと思ってしまう」と作者は仰る。食糧事情が悪く戦争もあって多くの人が亡くなっ

た時代を生き抜いてきた作者の「ただ元気でいてくれたらよい」という言葉には重みがある。世代によって考え方に違いがあるにしても、わが子を想う親の気持ちは変わらない。『万葉集』にも次のような歌がある。

銀も金も玉も何せむに

まされる宝子にしかめやも 山上憶良

山上憶良の「子等を思う歌」の一首である。

この世をば散りて去りたるさくらばな

実をば結ばめ春は来ずとも 成秋

濱野成秋先生の歌。桜の花でご自身の気持ちを表現されている。一般的な桜であるソメイヨシノは、花は美しいが実を結ばない。桜の花のように自分も散ったら終わりなのだろうか。たとえ散ってしまっても春が来なくとも実を結んで次の世代に残してほしいというお気持ちがある。ご自身のお仕事などを振り返ってみても、たいして実を結んでいない気がして、この歌が出てきたと仰る。それぞれ歩んで来た道は違えど、誰もが同じ気持ちではないだろうか。

『新古今和歌集』に後徳大寺左大臣の桜の歌が収められている。

はかなさをほかにもいはじ桜花

咲きては散りぬあはれ世の中

後徳大寺左大臣

世の儚さは桜の花の他には喻えようがないと言っているが、濱野先生の歌にも通ずるところがある。

だんボール入りし柔らかか春キャベツ

家族総出の収穫すすむ 良江

描写が巧みで鮮明に情景が浮かんでくる。三浦はキャベツ畑が多く、春にはこの歌のようなシーンがよく見られる。キャベツは夏にも収穫されるが、収穫のスピードが要求されるのか家族総出で行うのは春なのだそうだ。柔らかくて甘い春キャベツも採れたては鮮度がよく当然美味しいのだろう。

相模湾一望にして春霞

湯舟につかり友と語らむ 艶子

ご友人と熱海に行き楽しい時間を過ごして幸せを感じた時に詠まれた。情景がはつきり浮かんでくる。まるで絵画を見ているかのように描写に無駄がない。友と語らふ声までが聞こえてきそうである。「相模湾」という具体的な場所を示す固有名詞の使用もこの歌では成功している。作品に現実感を与えるとともに、この辺りを知る者なら海には何が見えるのか、伊豆大島か伊豆半島か三浦半島かなどと想像できるのもまた楽しい。

花時に自肅求むる時の疫^えに

太子^い偲^まびて現在^{いま}を生きゆく 裕二

今年は聖徳太子の千四百回忌の年で、四月の初めに奈良の法隆寺で法要が行われた。百年に一度の節目だったが、新型コロナウイルス感染症の影響

響で感染防止対策を行って規模を縮小しての実施となった。その様子をニユースで見て筆者が詠んだ歌である。

美しく桜が咲いても昨年に続き花見はできず、接触や蜜を避けるため人に会うこともままならない。この生活はいつまで続くのだろうか。日本のように人びとの自粛に任せてそれなりに行動が抑えられている国は珍しいと言われている。国民性と言えばそれまでだが、なぜそうなったのか。聖徳太子が作った十七条の憲法は第一条「和を以て貴しと為す」で始まる。

日本人はその精神を現在まで受け継いできたのではないか。聖徳太子は当時猛威を奮った流行り病で亡くなったとされている。太子はちょうど今の筆者の年齢で亡くなった。千四百年の時を越えて、今一度太子の教えに耳を傾け、コロナ禍を生き抜いてゆかねばならない。そんな気持ちでこの歌を詠んだ。

夫とゆく揃いのマスクでコロナ禍を

浮世さだむや総合病院 弘子

上句を読んで仲の良いご夫婦が一緒にご旅行にでも出かけられるのかと思つて下句に進むとお二人で通院されることがわかり一気に緊張が高まる。作者は先日夫に病気が見つかりご夫婦で病院に行かれた。二人で通えるのは嬉しいが、その場所が病院で、しかもコロナ禍。夫の病気とコロナの両方が心配になる。その浮き世を定めてくれるのが大きな総合病院というまとめ方はお見事である。

自衛隊訓練生はひたすらに

パドル動かす春の潮うしほに 尚道

自衛隊武山駐屯地に陸上自衛隊高等工科学校があり親元を離れて全国から学生が集まってくる。今の時期は学校前の長井の湾でカヌーをやっている姿をよく見かける。学生は必死にパドルを漕いでカヌーを進めるが、腕

力の違いが如実に現れる。まだあどけなさが残る新入生も厳しい訓練を受けて卒業する頃には心身ともに逞しくなり立派な自衛官になって巣立ってゆく。在学中は給与が支給されるのだから規律や訓練は相当厳しい。本作からもその厳しさが伝わってくる。

「春の潮」という言葉から受ける温かい海でみんながのんびり遊んでいるような印象と、そのような場所で「ひたすらにパドル動かす」という厳しい訓練に真面目に取り組んでいることを表す二つの言葉の組み合わせが秀逸である。遊びたい盛りの若者たちが、楽しくしている人たちを横目にストイックに訓練に打ち込むその姿が目に見え浮かぶ。

四 新緑に心和み

筍を煮て食^はみしあと楽しみは

皮で梅干しはさんでしゃぶる 光枝

作者は筍の時期になると中身は煮て食べて、剥いた皮をきれいに洗ってその中に梅干を挟んでしゃぶる。風習のようなもので三浦出身の年配の方なら経験のある方も多い。薄しよっぱい味がして、昔はお菓子などなかったものでそれがお菓子になった。挟んだ梅干しで皮が赤くきれいに染まるのが楽しみで、作者は今でも筍を食べた後に、その昔ながらの懐かしいお菓子をときに口にされている。

竹の皮には防腐効果があるので食材などを包むのにも使われる。保存食の梅干しと組み合わせで子供のおやつにしたのは昔の人の知恵だろう。残念ながら筆者はこの「楽しみ」を知らないが、梅干しの色が滲みて皮が赤く染まると伺ったので、歌に赤いイメージが加わり、色彩的に豊かな印象が生まれた。

ガン癒えし八十路の弟は入院を

「独房のよう」春一ばん吹く 由良子

作者は七人兄弟で、そのうちの六人が女性で真ん中の弟さん一人だけが男性。弟さんは兄弟の要だったが、昨年癌になって入院を繰り返された。兄弟は皆たいへん心配され、一日も早い快復を祈られた。弟さんは「入院の辛さは独房にいるようだ」と語られ、大切な弟さんが「自分はまだ死ねない」と辛い治療に耐えて春一番が吹く頃に元気になられて本当に有り難いと思われた。その気持ちを何とか形に残そうとこの歌を詠まれた。弟さんに対する思いが強く伝わってくる歌である。

春霞。ピンクに染まる夕富士は

羞じらいながら楚々と佇む 和子

作者のお住まいになっているホームからは富士山が見える。一日に何回も眺めると、富士山はその時々違った姿を見せてくれて、色も違えば大ききさえも違って見える。力強く雄大に見えることもあれば、ほっそりと着物を着た女性のように美しく見えることもあり、本作は後者の女性的に見える富士山を詠まれた。「ピンクに染まって楚々と佇む」と乙女のように富士山を表現されるのは、作者ならではの感性である。

富士山といえば、百人一首の山部赤人の歌が思い浮かぶが、この歌の原歌は『万葉集』にある次の歌である。

田児の浦ゆうち出てて見れば真白にぞ

不尽ふじの高嶺に雪は降りける 山部赤人

目の前に現れた雄大な富士山の姿をストレートに詠っている。原歌に比べると百人一首の歌の方は少し柔らかく幻想的になっている。

楠の木よ三百年の時重ね

若葉豊かに朝日輝く 艶子

作者のご自宅のお隣には樹齢三百年の楠の大木が生えている。すぐ隣に住んで十五年になるが、それ以前も入れば四十年も毎日その木を見ながら過ごしている。

樹齢三百年というところかなり古い木のように思えるが、もしかするとそれは人間の基準で、木にしてみればまだまだだという感じなのかもしれない。

「若葉豊かに朝日輝く」という下句から三百年生きても未だ衰えぬ生命力が伝わってきて、神秘的な姿を想像させる。

日本の巨木には楠の木が多い。巨木は信仰の対象になることが多いので、日本人にとって楠の木は特別な木であると言える。歌に詠まれた楠の木はこれから作者のことを静かに見守り続ける。

野の畑に作りし苺熟す頃

里山の主我を先超す 弘子

作者は現在自家菜園でイチゴを栽培されている。実がなって熟すのを楽しみにしていたら、収穫する前に何者かに食べられてしまった。畑に貼つてあるビニールシートの上には肉球のような足跡が残っていた。タヌキではないかと思うが、姿を見たことがないので正体は不明で、腹の立つことに赤く熟したイチゴを選んで食べている。畑の周りに侵入を防ぐための網をしつかり張り巡らせるまでイチゴは食べられ続けてとても悔しい思いをされた。

下句から伝わってくる「相手の方が一枚上手」という感じから、動物に対して理解を示しながらもやはり悔しくて腹立たしい気持ちはどこか収まらない心境もうかがえるように上手く表現されている。何だか微笑ましくも思えるのだが、それは筆者がイチゴを食べられていないからである。

うばたまの闇に潜みて鳴くかはづ

今宵ふたたび春雨のふる 裕二

何気ない日常を詠んだ筆者の一首。最初に「うばたまの闇」とあることで視覚のイメージは広がらずに読者の意識が音に集中し、蛙の鳴き声だけが響き渡る。雨も降っているが、静かに降る「春雨」である。蛙の鳴き声だけが耳に、心に広がってゆく。読むと音が聞こえてくるような歌にしたいと思った。

「うばたまの」は夜、闇、夢などの黒いものにかかる枕詞で、「ぬばたまの」も同じ。ヒオウギという植物の黒い種子のことを「うばたま」・「むばたま」と呼び、漢字ではそれぞれ「烏羽玉」・「射干玉」と書く。枕詞としての働きは同じなので、どちらを使用してもよかったが、本作では漢字にした時の印象や「ぬばたま」よりも「うばたま」を使った歌が少ないので「うばたま」にした。

「ぬばたまの」というと斎藤茂吉の次の歌がある。

ぬば玉のふくる夜床に目ざむれば

をなご^{きちがひ}狂の歌ふがきこゆ 茂吉

歌っている女性は、岡場所で働いていたときに梅毒をうつされ、その菌が頭に回って気が変わってしまった。夜中に聞こえてくる彼女の歌を色町にいる作者は添い寝する女性と聞いている。そんな情景の歌であると濱野先生が解説してくださる。茂吉には「かわづ」が出てくる次の歌もある。

死に近き母に添寝のしんしんと

遠田のかはづ天に聞ゆる 茂吉

ブロッコリー好める家猫感知して

湯がける時よりすでに待ちをり 良江

動物を飼っていない者からすると、動物を飼われている人は、動物との距離感がとても近く思える。同じく動物を歌に詠んでも、例えば筆者の歌のどこかで鳴いている蛙と、本作の背後で待ち構える猫とでは、物理的にも心理的にも距離の違いは明らかである。飼われている人はまた動物の気持ちを理解されている気もする。

猫は魚や肉が好きだと一般的に思われているが、ブロッコリーが好きだと聞いたのは初めてで、茹でたてのブロッコリーを狙う猫という設定がユニークである。

パソコンのクリック一つで人生を

変えられるなら既に初夏 尚道

パソコンを操作すれば様々なことができる。クリックひとつで場面は次々と変わってゆく。人生もそのように変えられたらという思いを詠まれた。パソコンの画面の中の世界を行き交い、気がつくと初夏だった。浦島太郎のように時間の過ぎるのは早い。

コンピューターによって生活は大きく変化している。コミュニケーションの手段も変化し、現在は電子メールやSNSなどのネットでやり取りが行われることがほとんどである。昔とはスピード感が違う。地球の裏側にもメッセージは一瞬で届く。郵便配達を待っていた頃が懐かしい。新型コロナウイルスの影響で場所の制約を受けないリモートワークが推奨され、社会のオンライン化が一気に進んだ。皆が集まって直接顔を見ながら話し合う機会は少なくなっただろうか。

田の里に住ひし父母の影遠く

いま帰る身に降る蟬しぐれ 成秋

上句の「父母の影遠く」から既にご両親が亡くなられてかなりの年月が経っていることが想像される。下句に「帰る身」、「蟬しぐれ」とあることからお盆に故郷のご両親のお墓参りをされている光景が浮かんできた。たくさんの蝉が一斉に鳴いているのを時雨の音に喻えて「蟬しぐれ」とは、日本語は本当に表現豊かで美しい。その蟬しぐれが身に降ってくるという表現は秀逸で、初句にある「田の里」と合わさって視覚と聴覚の両方のイメージを膨らませる。「田の里」という言葉が土を感じさせることで蟬が活

かされる。蟬と言って筆者がまず思い浮かべるのは、蟬の一生である。蟬は地中で何年も過ごし、ようやく成虫になって地上に出ても生きられるのは一週間。地上で力の限り鳴き続け、やがて儚く散ってゆく。最近の研究では蟬は一ヶ月程生きられるとされているが、それはあくまで科学的なことで、蟬は桜と同様にわれわれに生命の強烈な印象を与える。

「蟬しぐれ」という結句によって蟬の声がいつまでも心に響いて余韻が残る。岡本かの子にも次のような歌がある。

鳴く蟬の命の限り鳴く声は

夏のみそらにひびき泌みけり かの子

五 空に向かって

コンビニの防犯カメラに燕の巢

親鳥ひたすら餌をはこびくる 尚道

誰もが一度はつばめの巢を見たことがあるだろうが、さすがに防犯カメラの上の巢はないだろう。防犯カメラという人間が同じ種族の人間を疑って取り付けている装置にお構いなしにつばめが巢を作るのが、人間をあざ笑っているかのようでとても面白い。

スーパーの入口にある貼り紙に

「トンビに注意」今日は梅雨入り 良江

実際に張り紙がされていたのをご覧になったのだろう。三浦ではとんびはよく見かけるが、さすがにスーパーという場所との組み合わせは意表を突くもので、強く印象に残る。下句の「今日は梅雨入り」で「お知らせ」が歌になる。

夕空に生気みなぎる点描画

騎虎の勢ひむくどりの群れ 裕二

毎年この時期になると住んでいる街の駅前にもくどりの群れがやって来る。その数たるや驚くほどで、鳴き声も大きくて人の話し声も聞こえないほどである。何かの拍子に一齐に飛び立つと右に左に旋回し、その光景は巨大な点描画が動いているかのようでその迫力に圧倒される。

東海の益荒男成りしマスターズ

亡き夫ならばいかに思ふや 由良子

ゴルフのメジャー大会である「マスターズ」で松山英樹選手が日本人として初優勝を果たした。作者の亡き夫はゴルフが好きだった。もし彼が生きていてこの快挙を知ったとしたらどんなに喜んだであろう。ゴルフのニユースに亡くなった旦那様のことを思い出されて詠まれた一首。

最近では野球の大谷選手やテニスの大坂選手など世界の第一線で活躍する日本人アスリートも登場しているが、体型によるものなのか長い間スポーツ界では日本人が活躍できなかった。いわゆる「世界の壁」があった。作者によれば、とりわけ男子ゴルフはこの「壁」が高く、これまで幾多の日本人トップ選手が挑戦しても誰もメジャー大会で勝つことはできず、マスターズ制覇は男子ゴルフ界にとって祈願だった。

ワクチンの接種予約は成功も

スマホ操作に奮闘五時間 光枝

作者はワクチン接種の予約にとっても苦労された。予約電話は混み合って一切つながらないため、スマホによるネット予約を行ったが、操作法がわからなかったり不具合が出たりして完了するまでに五時間もかかった。

本作においては、他にもない「五時間」というのが秀逸である。結句にキレを出すためには一音になる数字を選ぶことになるが、二、四、五、九とある中でさすがに九では長すぎる。次に長く、奇数の五が最善だろう。筆者の私感だが、偶数は奇数よりも安定感があり優しい印象を受ける。奇数の「五」という数字が「奮闘」という言葉と相まって、慣れない作業への不安や苛立ち感を上手く醸し出している。

くちびるや歯牙にまとひし言の葉を

秋風に舞ふ瞳に告げをり 成秋

この歌は次の松尾芭蕉の俳句の本歌取り。

物いへば唇寒し秋の風 芭蕉

芭蕉はこの句の詞書で、余計なことを言うと言いと災いを招くので言葉を発するときには注意しなさいと説いた。俳聖ともあろう人物が詩歌でごく当たり前の市井の道徳を説いていることにがっかりしたと作者の濱野先生は仰る。自分をさらけ出してこそ文学であろう。

人間はときに他人を非難したくなるが、「まとひし」と表現したようにたいていその言葉を声に出すことはしない。では非難しないかと言えば、否である。目は口ほどに物を言うというように、口では言わず、目で告げて非難しているのである。そんな嫌らしい我が心を見てくださいという歌である。

小雨降るブーゲンビルに鎮魂す

万葉の歌父と捧げん 弘子

作者のお父様は戦争中にブーゲンビル島におられたので、戦後は島を訪れることなく亡くなられたが、きつと訪れたかったのではと作者は思われた。今から十二年ほど前にお父様の魂と一緒に行くつもりで、ブーゲンビル島に慰霊の旅に行かれたのを詠まれた歌である。「万葉の歌」とは『万葉集』にある大伴家持の歌から詩が採られた『海行かば』のことだろう。

九時に寝る忙しき頃の夢を見て

五時四〇分 今日も日曜 和子

五時四十分というかなり細かい時間だが、忙しくしていた頃には夜は九時に寝て翌朝早く起きていた。今は早く起きる必要がないのにその頃の夢をみて五時四十分が目覚めてしまったという実体験を詠った歌であろう。

木漏れ陽の光鋭く空を裂く

心ふるえる白内障オペ 艶子

白内障の手術をしたことのある人はこの歌の「光鋭く」の部分などがよくわかるが、本作は手術前に詠まれた。「木漏れ陽」や「空」というあまり手術とイメージの重ならない言葉に「鋭く」や「裂く」のような言葉を組み合わせて、下句の手術とイメージを繋げ、全体がうまくまとまるように工夫されている。

クラス会年重ねたる老の身を

忘れ乙女にもどるひと時 晴美

クラス会では皆が当時に戻ってしまうのは、クラス会に出席すれば誰もが経験することである。クラス会での楽しい笑い声が聞こえてきそうな誰もが共感できる素晴らしい一首である。

六 様々な別れ

夫逝きて十年となり独り居も

「なれましたよ」と花を供へる 光枝

作者のご主人が亡くなられて今月で十年になる。ひとりの不安や寂しさはあるが、現在は自由な時間をいただいたと思うようにしておられる。ただ、自由を感じているとはいえ、夫婦はやはり喧嘩をしているうちが華であると作者は仰る。お気持ちが変わりやすく表現されていて、パートナーを亡くされた方はとくに共感できる歌である。

産土の宮に飛びかうつがい鳥

おいかけおいこしいずこへか消ゆ 弘子

作者の話では、実際には鳥ではなく蝶だったそうだが、ご自身が目にした光景を詠まれた。ご主人の手術前に神社に寄ってお願いをした際に、二匹の蝶が追いかけ合うように飛んでいて、しばらくするとどこかに消えていった。その蝶を見て、何だかご夫婦の人生と重なるように感じてこの歌を詠まれた。映像が目に浮かんでくる。

衣笠の寓居手放す日も近し

十歳とせの哀歌も幻と化す 成秋

衣笠にある別邸を手放されるお気持ちを詠まれた歌。家とともに過ごした思い出も失われてしまうような気持ちになる。家だけでなく長く愛用した物や形見など過去を思い出させる物であればみなそうである。自

分の人生の一部が欠けてしまうように感じて悲しくなる。しんみりした調子で心に余韻が残る秀歌である。俳句も一句詠まれた。

薔薇一輪咲いて衣笠売りて去る 成秋

梅雨はしり仙台秋保あざやかな

あきう

みどりと藤とあたたかき人と 由良子

作者が五月に秋保温泉に旅した時の一首。秋保温泉までは仙台からバスで四十分ほど。新緑を眺めながら向かっていると、その緑に天然の藤が美しい彩りを添えていた。秋保温泉の美しい風景とさらに地元の人たちの温かさに感動された。梅雨前のぐずついた天気を吹き飛ばすような爽やかな歌である。

早朝のバスの人々会話なく

マスクを付けて皆前を見る 尚道

何気ない日常の光景が詠まれているが、「マスクを付けて」とあれば、現在のコロナ禍では読み手は様々に想像をめぐらせる。不要不急の外出の自粛が求められる中、乗客は早朝にどこへ向かっているのか。仕事だろうか、買い物だろうか、ワクチン接種だろうか。会話がなひのはひとりで出かけているからか、感染予防のためか、同調圧力のためか。いつまでこの生活が続くのか。結句「皆前を見る」に、社会の閉塞状況の中でも前を見てゆこうという思いが込められている。

夫婦じアない夫婦以上のカップルの

声弾みおり朝の食卓 和子

ホームにお住まいの作者が朝の食堂の光景を詠まれた歌。ホームには、伴侶を亡くされひとりで入居されている方で、ここで知り合ってカップルになられた方がいる。「夫婦じゃない夫婦以上のカップル」とはその方がテレビのドキュメンタリー番組の取材の際に自ら語った言葉である。高齢の方が暮らすホームというと、どこか静かで暗い印象を持ってしまいが、明るくはつらつとした入居者の姿を描く本作からホームのイメージが変わった。

蓮華の薄紅白く移ろひて

はすはな

待ちたるのみや散りて枯るるを 裕二

筆者が家の近所の公園に咲く蓮の花を見て詠んだ一首。蓮の花は早朝に開き、夜には閉じるが、わずか四日で散ってしまう。花の美しい紅色は一日ごとに薄くなり、四日目にはほぼ白色になる。紅色の花に混じって咲く白色の花は午後には散る。自然の摂理とはいえ、どうにも切ない。

夫忍び保安林保護呼びかけむ

故里の海永遠の碧さを 艶子

とわ あお

作者のご主人は生前よく寄付をされていた。若い世代の助けになればと地元の高校の保安林にも助成され、その森が三浦の海さらに世界の海を守ってくれることを祈っておられた。保安林を守るために高校では生徒のクラブ活動の一つにしようとするが、活動費不足が問題となっている。ご主人の意思を受け継いで活動される作者のお気持ちと海の「永久の碧さ」が美しく調和する。

鶯の声がしきりに響く朝

まねして口笛吹きて返せり 良江

自然豊かな三浦では鶯の鳴き声がよく聞こえてくる。美しい鶯の鳴き声を聞けば、真似して口笛を吹いてみようと思いが一度は思う。作者のお話では、実際に真似をしたら、鶯が近くまで来て、その時初めて鶯を間近でご覧になり、色は茶色だとは聞いていたが本当にその通りだった。岩手県の民謡「南部茶屋節」に「声はすれども姿は見えぬ藪に鶯声ばかり」という一節がある。英語では鶯はジャパニーズ・ブッシュ・ウォーブラーといい、ブッシュ・ウォーブラーとは「藪でさえざる鳥」といった意味である。鶯は警戒心が強くめったに姿を見せない。

七 秋の訪れ

コロナ解けわずかに残れる中学の

クラス会あり久しい便り 由良子

コロナ禍の現在は内容が非常によく理解できる歌。クラス会で級友に会える喜びと参加できる人が少なくなった寂しさの混在する気持ちを詠んだ味わいのある一首である。

人世老ひかばひとよそき腕かひなで野分け戸を

閉めて雷いかづちしつぽり想ひて 成秋

台風が来るので自分の老いさらばえた腕で雨戸を閉めると外で雷がなっている。その状況に作者はお母様が三味線を習ってきて歌っていた俗謡を思い出され、その歌に雷さんが戸を閉めてふたりしつぽりという歌詞があり、下句はそこから。調べてみると「新土佐節」という座敷歌で次のような歌詞である。

雷さんは粋な方だよ 戸を閉めさせて

二人 しつぽり 濡らした 通り雨よ

そうだ そうだ まったくだよ

歌からだけでは読み取れないが、作者のお母様への思いも込められた一首である。

きぬかつぎ茹でて塩つけ食すれば

旬の小芋はやっぱり旨し 光枝

きぬかつぎとは里芋を皮のまま茹でたもので、この時期に里芋の小芋が旬で美味しい。作者は食にまつわる歌を多く詠まれるとのことだが、食文化という言葉があるように、食は民族や地域を特徴づけるものであり、何をどのように調理してどのような作法で食べるのかはまさに歴史や文化そのものである。

秋めいた風の音 聞くラジオより

「少年時代」たびたび流る 尚道

「少年時代」は一九九〇年にリリースされた井上陽水のヒット曲である。この曲を知らないと言ったところがありにくい。

「夏が過ぎ風あざみ」という歌詞で始まる「少年時代」は、歌詞から判断すると、過ぎ去ってしまった夏の思い出に浸る「私」のことを歌っているが、この曲は秋になるとラジオ等でよくかかる。これを聞くと秋になったと実感される。さらに作者は古今和歌集に収められている藤原敏行朝臣の次の一首も念頭に詠まれた。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行朝臣

紅葉や月などを見て秋を感じることが多いが、作者は風の音やラジオから聞こえてくる曲を聞いて秋を感じている。作者の豊かな感受性を表す一首である。

夕暮れに月下美人を褒められて

娘と思うか落ちつかぬ夜 和子

月下美人の花は夕方に咲いて一晩で散ってしまう。この歌は、育てている月下美人の花が咲いたことを歌ったのか、それとも何かの例えだろうか。「娘」の解釈は両方可能である。「娘」というのは月下美人のことで作者は月下美人を娘のように思っているという解釈と「娘」とは作者自身のこと、月下美人を褒めてくれた人がまさか自分をそんなふうにするのかと何となく落ち着かないという解釈である。どちらの解釈が正解なのかではなく、想像をかきたてて様々に解釈できることが、この歌の魅力である。

晩秋の道に落ちたるどんぐりの

行く末われに重なりて見ゆ 裕二

秋も深まりどんぐりが道に落ちて転がっている光景を目にして詠んだ歌。土の地面に落ちればやがて芽を出すのだろうが、ほとんどが舗装された道路に落ちて通行する人や車に踏まれている。わずかに道の隅でひっそり難を逃れるものや道の真ん中でも無傷のままの強運を持つものもいて、どこか人の世を見ているような感じがした。

コロナ禍の新しいままの靴履いて

半歩踏み出す青天だから 弘子

母の日に娘さんから靴をもらったのに、コロナ禍でどこにも行けずに長く下駄箱に入れたままになっていた。緊急事態宣言が解除になり、台風一過で晴天になった日に、ようやくその靴を履いて出かけようという気持ち

になったが、コロナが収束したわけではない。不安は消えず、まだ一步は出られない。コロナ前のようにはいかない気持ちを「半歩」という言葉に込められた。コロナ禍でどこにも出られないことを新しい靴で表現するのが秀逸である。

台風に打たれて濡れしゴーヤーの

実は残りをりふとらぬままに 良江

作者は家庭菜園をされている。日照不足と雨が降り続いたことで育てていたゴーヤーのできが悪い。その状況を写生した歌である。ゴーヤーの収穫期は七月から九月頃までだが、最後の収穫が残念な結果となったのだろう。ゴーヤーはその苦さのためか野生動物に食べられることもなく天候がよければ立派な実が収穫できる。実が痩せて軽いために台風に見舞われても落ちずに残っているのが切ない。ゴーヤーを他の野菜にしましてはこの哀愁は出ない。

雨風に秋の訪れ聞きし日は

夫のぬくもりおぼろなつかし 艶子

ご主人が亡くなって三年が経過し、最近はよく思い出される。秋が来て寂しい気持ちになったときに、ご主人の優しさを思い出されて詠まれた歌である。亡くなってしばらく思い出が濃く詰まっていて、それからだんだん薄れていく。「おぼろ」は春の季語なので秋の歌に使うことを作者は気にされたが、短歌なので問題はない。

八 優しきまなざし

サッカーのボール背負いて登り坂

脱兎のごとき少年の秋 由良子

十一月三日、文化の日の晴れ渡った午後、サッカーボールを背負って急な坂道を元気に駆け上がったいく小学生を目にされた。坂道の上から差した秋の日を浴びて脱兎のごとく駆けていく姿に、前途ある少年をうらやましく思われ、その情景を詠まれた歌である。

少年の若々しさを独特な表現を用いて伝えている。全体として情報がうまくまとまりバランスが保たれる言葉と語順が選ばれているのが見事である。

小六の孫より電話声弾み

修学旅行「行けるんだよ」 光枝

新型コロナの影響で、学校行事はみな延期や中止になっていて、修学旅行も実施が危ぶまれたが、行けることになり、その喜びを伝える電話がお孫さんからかかってきた。「小六」なので初めての修学旅行、しかも半ば諦めていただけに喜びもひとしおであるのが、歌から伝わってくる。お孫さんの弾む声が聞こえてくるようで、誰もが「本当によかったね」と言っておあげたくなる、読んで優しい気持ちになれる歌である。

秋空やセピアの記憶たゆとうて

ラインダンスの靴音高く 艶子

くつおと

作者は実際に昔ラインダンスをされていて、そのことを思い出されて詠まれた。ラインダンスの躍動感を出すために、上句はどこか抽象的で静かなイメージにし、下句が具体的に動的なイメージになっているため強い印象と余韻が残る。

ちちはは みえい こわ
父母の御影は怖し若きまま

今宵は何処いづくと目が問ひ給ふ 成秋

御影のご両親の目線が、作者に今夜はどこに行くのかと言っているという歌だが、「怖し」という言葉が効果的である。御影のご両親が現在のご自身より若いという事実と遊びに行くことを見抜いているような印象により、亡くなってもまだご両親の影響力は健在であるかのような不思議な空気が漂う。この歌から伝わってくるのは、作者はいつもご両親のことを思い、亡くなられたご両親はいつも作者のことを見守られている家族愛である。

病床の父我を見たまなざしは

確かにあれは眼施と云うなり 弘子

入院されていたお父様のことを詠まれた歌。作者は入院中のお父様を毎日訪問されていた。ある時、気管切開をして話すことのできないお父様が、帰宅する作者をとっても優しいまなざしで見られた。作者にはその目が「ありがたい」と言っている気がした。お父様のそのようなまなざしを見るのが初めてだったので、それをずっと覚えておられ、後に仏教の本を読まれた際に、「無財の七施」の一つである眼施を知り、あのまなざしは眼施であったと思われた。仏教には「無財の七施」といわれる七つの施しがあり、その一つ目が眼施で、優しい眼差しで人と接することである。

謂^{いは}れなに回り道せり黄昏の

われ迎へてや銀杏散り敷く 裕二

たまたま回り道をする、銀杏の葉が落ちて道が黄金色の絨毯を敷き詰めたようになっていた。その美しい光景を見て詠んだ歌であるが、自分の人生も重ね合わせた。「謂れなに」は理由もなくという意味である。

東名の高速道路は工事中

海老名SAすでに渋滞 尚道

ラジオの道路情報で高速道路の工事情報が繰り返されていたが、用事で出かけてみたら渋滞していたという歌である。作者によると、短歌には深い意味が込められた作品もあるが、とくに意味のない歌があってもよいという考えで詠まれた。

ボタン穴一つ一つを見つめつつ

姉が手編みしカーデガン着る 和子

編み物が好きだったお姉さまが編んでくれたカーデイガンは、ボタンの穴も一つひとつ丁寧に作っており、それを見ると姉さまの心に触れる気がして、ずっと見つめてしまう。お姉さまのことを思っ詠まれた心に響く歌である。

石路の花咲き始め故郷の

野路^{のみち}を想ふ祖母と歩みし 良江

美しい情景の浮かぶ歌である。四句「野路を想ふ」と結句「祖母と歩みし」の順序が議論になったが、連想された順に並べることで、読者が作者の気持ちにより近づける作品となっている。一緒に歩いたのが祖母であることが温かい気持ちにさせる。

しろあと
城跡をもとほり歩けば魂しぐれ

黒き裸枝吾に問ひかけ 満美子

作者は衣笠城のすぐ近くにお住いになっている。あるとき城跡を歩いていると雨が振り始めた。衣笠の戦のことをご存知の作者には、その雨は亡くなった人の御魂が時雨のごとく降っているかのように、見上げれば葉が散って黒くなった枝が自らに問いかけてくる。作者ならではの感覚で詠まれた素晴らしい歌である。

九 コロナ禍で迎える新年

コンビニのバイクの横で仁王立ち

飯食む若者吐く息白し 由良子

コンビニの駐車場で腹ごしらえをする若者を描写するが、実際に寒い朝にコンビニで若者を目にし、若いとは素晴らしいと思われて詠まれた。

コンビニに停めたバイクの横でおにぎりかパンにかぶりつく元気な若者の姿がまず浮かび、さらに吐く息が白いことから寒い早朝だと想像させる。仲間とツーリング中にコンビニに立ち寄ったのだろうか。ツーリングを楽しむ元気な若者たちには、朝の寒さなどまったく問題にならない。青春である。この歌は、言葉の選び方と順序が秀逸で、映像作品を見ているような展開と情感を与える歌になっている。

房総の山並み眺む人多き

初日昇れば拍手し拝む 光枝

作者は、房総半島の山々から昇る美しい朝日の見られる絶景の場所を存じて、毎年そこに行つて初日を拝まれる。知る人ぞ知る場所であったが、最近を知る人も徐々に増え、元旦には人が集まるようになった。今年の元旦は晴天で雲もなくとてもきれいな初日が見えて、以前ならば歓声が上がるところだが、コロナで皆がマスクをしているため拍手が起こった。

古里に帰りて思ふは繰り言ぞ

ときよ 時世の渦に浮きつ沈みつ 成秋

濱野成秋先生の歌。ふるさとに帰ると過去のことを思い出し、ともすればあの時はこうすればよかったと繰り言になり、時世の移り変わりの中で様々なことがあったとしみじみ考えてしまう。ふるさとはすっかり都会化して変わり果ててしまい、今では懐かしいのはお墓だけ。自分も変わりふるさとも変わって、いったいどこに思い出のよすがを求めればよいのかわからない。作者はもう一首ふるさとの歌を披露された。

古里の盆の太鼓は哀しけれ

路ゆく人のみな変わり居て 成秋

作者によればふるさとの河内音頭も昔は勢いがあつたが、今では昔のように歌える人もいなくなり、遠くからプロを呼んでなんとか開催している有様である。ふるさとはいつまでも変わらないでほしいと思うのは上京者であれば同じである。

太陽の電池に動くパンダたち

冬日を受けて活動開始 尚道

上野動物園のパンダが話題になっていたので、パンダを玩具に例えたのかと思つたら、ご自宅にあるパンダの人形について詠んだ歌である。本作では「パンダ」と「冬日」がキーワードだろう。犬や猫では面白くない。容姿も存在もユニークなパンダが数頭、冬の弱い日差しのためにパワー不足でゆっくりと動いたり止まったりする様子を思い浮かべればこそ、機械的な人形にコミカルながらもペーソスが生まれる。この効果も計算して描写されている。

ふるさとの駅しじまの静寂に降り立たば

名残の空に風花の舞ふ 裕二

筆者は新型コロナの影響で愛知の実家に帰省できない日々が続いたが、大晦日に数年ぶりに戻ってお正月を実家で家族と過ごすことができた。愛知の南の方なのでめったに雪は降らないが、駅に着いた時に珍しく雪が舞っていた。「名残の空」とは大晦日の空を表す言葉で、翌日の元旦の空は「初空」とか「初御空」という。

「さあ打つぞ」旗をめざして心飛ぶ

ボールはオレンジラッキーカラー 和子

作者は一年ほど前からグランドゴルフのサークルに参加され、週二回の練習をとっても楽しみにされている。元気にボールを追いかけるお姿が目に見え、浮かんできて、観衆になったような気になり、思わず「がんばって」と声をかけたくなる。躍動感のある作品で、元気の出るビタミンカラーのオレンジがラッキーカラーというのも効果的である。グランドゴルフはゴルフの簡易版で、ゲートボールのようなチームプレイではなく、個人で戦う。

沖縄の海岸に住むアヒルの子

ラインにて観る名前はガーク 良江

作者は沖縄のご出身。ご実家の前の海岸にアヒルが住み着いていて、一羽だったのがいつの間にか三羽に増えた。アヒルは池や川などの淡水域に生息するイメージがあるが、雑食なので海岸でも大丈夫なのだろう。アヒルの子の名前が「ガーク」とはいかにもで、常套になりそうだが、アヒルの持つどこかコミカルでとぼけた感じが逆に出て効果的になっている。アヒルには「刷り込み」という初めて見た動くものを親だと思いう性質がある。

親アヒルの後について行くガーコの姿を想像したりすれば、なんとも微笑ましい気持ちになる。

来し方を想い眺めるわが心

せいぜい
清々とした天に預ける 満美子

今年の元旦は素晴らしい天気だった。年が明け、これまで自分がやってきたことを自ら認めようかどうかとあれこれ考えていると、これからはその清らかな天にすべてを預けて生きてゆけばよいのだと思われる。目の前の青空のように、心にかかっていた雲が消えて晴れやかになられたのが伝わってくる。諦めではなく、心の迷いが解けてありのままを受け入れられそうなお気持ちになられたのだろう。しかし複雑なのは、作者がなにかそう自分に言い聞かせているようでもあり、到達された境地にどこか心の「揺れ」のようなものを感じてしまう。

石川啄木の『悲しき玩具』に次のような歌がある。

年明けてゆるめる心！うつとりと

来し方をすべて忘れしごとし 啄木

来し方は人生の一部であり、消し去ることなどできない。岩間さんのようにそれを受け入れるという気持ちも、啄木のようにせめて正月ぐらいはそれを忘れてという気持ちもどちらも理解できる。誰もがその両方で揺れ動いている。

あの頃の「任せておけ」というガッツ

いつのまにやら空の彼方か 弘子

本作はは自分のことを詠まれたという解釈と、自分にそう言ってくれた人のことを詠まれたという解釈ができる。どちらでも読者が自由に解釈すればよいが、筆者は、作者が女性で「任せておけ」という台詞や「ガッツ」という言葉が男性的であることから後者であると考え。ご主人がご病気をされたと伺ったことがあるので、ご主人のことなのかもしれない。かつて元気でたくましかった夫が病気で氣力も弱くなってしまい寂しく思われて詠まれたのだろうか。筆者は「空の彼方か」は嘆きだと解釈した。

はらはらと初雪の降る嬉しさに

八十路超えても幼子のごと 艶子

雪国ではうんざりするだろうが、そうでない地域ではこの歌のように雪が降ると多くの人は何だか新鮮でうれしい気持ちになるだろう。

初句の「はらはら」という擬態語が議論になった。雪にまつわる擬態語としては「ちらちら」「はらはら」「しんしん」「こんこん」などが思いつく。斎藤茂吉に次の歌がある。

現身のわが血脈のやや細り

墓地にしんしんと雪つもる見ゆ 茂吉

やがて自分も墓に入るだろうと思いつながら雪がしんしんと降るのを見ている茂吉の歌は秀逸だが暗い。並べてみるとよくわかるが、同じ雪でもやはり作者の歌は「はらはら」、茂吉の歌は「しんしん」でないとしっくりこない。「はらはら」にどこか違和感を持つ人もいるだろうが、それはコロケーションのためかもしれない。「はらはら」の場合、「降る」よりも「舞う」という言葉と使われることが多い。

コロナ禍に追い打ちかけるオミクロン

備えし武具の盾にて守る 晴美

戦国の世の雰囲気醸し出すような言葉の使用が工夫されていて個性的な歌である。「備えし武具の盾」とはワクチンのことか。「追い打ちかける」も戦にまつわる言葉で上句と下句がつながっている。小さすぎて電子顕微鏡を使わないと見ることはできないが、コロナウイルスの表面にはスパイクと呼ばれる無数の突起があり、なるほどあのトゲトゲの姿は甲冑のようにも見える。まさに戦か。視覚的イメージを膨らませて詠まれた歌なのかもしれない。

十 雪が雨へと変わる頃に

寒風に凜と向かいに行く人に

吾も倣いて歩幅を正す 由良子

ある日の早朝、とても寒いのに年輩の方が凜として歩くお姿をご覧になり、作者もそれに倣って歩かれた。「歩く」という単純な言葉ではなく、「寒風に向かいに行く」や「歩幅を正す」のようなイメージの広がる表現を用いて臨場感を出されているのが秀逸である。

あと少し布団にもぐる寒い朝

時計見ながらあと少しだけ 光枝

この歌の気持ちを理解できない人はいないだろう。今の家は気密性や断熱性が高く昔の家のように隙間風が入ってくるようなこともないので、昔ほどはそう思わなくなった。とはいえ冷え込む朝には布団から出るのはつらい。

「あと少し」のリフレインがよい。「あと少し」で二度寝してしまい「大惨事」になった経験を持つ者には、背筋が寒くなる歌である。

憶良よ遺言おくらら いごんよ税よとめくるめき

昔の人もなくて逝くかや 成秋

山上憶良は遣唐使として最新の学問を修め帰国するも役人としては出世できず、昇進ではあるが伯耆や筑前の国守に任命され地方に飛ばされた。そこで詠まれた歌からは、その報われない気持ちが切々と伝わってきて、憶良が思っていたようなことを今ご自身が思っているのではないかという

気がして、作者は先人に向かって呼びかけられた。半分自虐的、諧謔的に書いたと仰るが、まさに「貧窮問答歌」の現代版である。

「憶良」をルビのように「おくらら」と読むことについて、これはリズムを作るためで「憶良等」や「憶良ら」にしてしまえば「憶良のような」という違う意味になってしまう。「ら」を入れることで初句と二句のリズムが格段によくなるのは音読すれば明らかである。

厚い手で生くるを紡ぐラカンパネラ

フジコヘミング御年九十 弘子

作者は昨年実際にフジコヘミングのコンサートを観に行かれた。九十歳のフジコは舞台に杖をつきながら現れたが、ピアノを弾き始めると別人のようで、テレビなどで伝え聞いている彼女の波乱の人生を思いながら演奏を聴いていると作者は涙が出るほどに感激した。力強くピアノを弾く分厚い手がとても印象に残った。

筆者はある新聞記事を読んだ。男性の漁師の方の話である。彼はテレビでフジコヘミングがラカンパネラを演奏するのを観て深く感動し、自分も弾いてみたいと五十代でピアノを始める。楽譜も読めず楽器の経験もなかった彼が、この超難曲を何年も猛練習し、ついにフジコ本人の前で演奏した。フジコのラカンパネラには人の心を動かす特別な何かがある。「ラカンパネラ」はイタリア語で「鐘」を意味する。

春立てど凍てつく風の吹きたれば

天地つつまむ夢幻の衣きぬに 裕二

春が来たのに冷たい風が吹いているので、夢や幻で世界を包んでしまおうというのが文字通りの意味である。とくに具体的なことは書いていないので、読者がそれぞれに解釈していただければよい。筆者は年が明けても

暗いことが続く世の中を思つて詠んだが、毎日寒い日が続いているから暖かい春の日を楽しく想像しているととてもよいし、ファンタジックな世界を想像してもよい。

もも
百々伝ふ衣笠城の井の端に はた

佇み向かひて父祖の聲聴く 満美子

作者のルーツである三浦氏のご先祖を思つて詠まれた歌である。初句の「百々伝ふ」は、謀反の罪を着せられ自害させられた大津皇子の辞世の歌からとのこと。

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を

今日のみ見てや雲隠りなむ 大津皇子

「ももづたふ」は磐余にかかる枕詞である。作者は衣笠城が長い歴史を持つことを表現したくてこの語を使った。「衣笠城の井」とは「不動井戸」と呼ばれる井戸で、言い伝えでは行基が杖で岩を打ち、水を湧かせたとされる。

池の鴨を見ながら自分は死んでゆくのだろうと思う大津皇子の「死」の歌に対して、城の井戸を見ながらこれからはご先祖のことを考えて生きてゆこうと決意する「生」の歌。どちらの歌も心に響く。

バイク音響かせて来る新聞に

立春の朝少し風あり 尚道

どこにでもある日常の光景だが、コロナ禍の現在、早朝に毎日きちんと新聞が届いたり、季節がいつものように移り変わったという何でもない

ことがとても大切であると誰もが痛感している。バイクの音、新聞のインクの匂い、立春の朝の気温、吹いている風と、身体感覚に訴える語が並んでいる。読むと感覚が刺激されるようで生きていることを再認識させられる歌である。

裏山の枇杷の花咲き近付きて

マスク外して香り吸い込む 良江

ご近所に枇杷の木があって花が咲くと散歩の際にその香りを楽しまれる。枇杷の花について『大辞林』には「初冬、枝頂に白色の小花を多数つける」とある。冬には咲く花も少ないので咲いていれば目を引くだろう。斎藤茂吉も枇杷の花の歌を詠んでいる。

枇杷の花冬木のなかにほへるを

この世のものと今こそは見め 茂吉

茂吉もやはり「香り」である。実際の香りを知らなくても、枇杷はバラ科なのでよい香りであることは想像できる。

初めてのビデオ通話に映りたる

老婆の我にギョツと驚く 員子

スマホを新しくしたのでビデオ通話をやってみたいと思い、娘さんに頼んでやってもらうと、画面に映った自分の顔にびっくり。「わたし、いつもこんなにひどい顔しているの」と言う。「そうよ」と娘さんから間髪入れずに返ってきた。年輩の方であれば、多かれ少なかれ同様の経験をされていて共感できるだろう。

テレビ電話のような昔はなかった新しいものを使い始めることで、自分もまだ若いような気分になりワクワクしながら試すと、自分の顔にギョツとする。そんな光景は何だか落語のようである。誰にとっても嫌な「老い」であるが、本作を読むと明るい気持ちになる。

雪山でふざけて買ったサングラス

手術のあとの眼覆へり 和子

白内障の手術をされたて、歌のように昔購入されたサングラスを使われているのだろうか。眩しいというのは、手術によって水晶体がクリアになったからで、ますます活動的でお元気になっていただきたいと思わせる歌である。

真の友どんな時にも頼もしく

アドバイスありやさしさもあり 晴美

作者にはこの歌のような素晴らしいお友達がおられ、その方のことを思い浮かべて詠まれたのだろう。ただ抽象的な語が多いために全体としてのメッセージが曖昧である。どんな時なのか、どのように頼もしいのか、どんなアドバイスなのか、どのようなやさしさなのか、どれか一つだけでもより具体的な表現があれば読者はイメージを膨らませやすいが、もしかするとそこがポイントではなく「あなたには真の友がいますか」と問うているのかもしれない。

十一 梅の花咲き散る

早咲きの桜まつりの取り止めも

人出は多く桜満開 光枝

河津桜のまつりが新型コロナウイルスの影響で昨年続き今年も中止された。まつりが中止になっても桜は咲き、桜が咲けば人は集まる。作者が行かれたときにも人はたくさんいて、人をかき分けるようにして歩いた。桜といってもいわゆるソメイヨシノではなく先に咲く河津桜である。種類は関係ないのだろう。桜であれば心は揺り動かされる。在原業平の歌にもあるとおり、日本人は本当に桜が好きである。

高齢の姉の誘いで梅見の会

思い出話し亡き兄若し 由良子

作者は三十一文字に自分の思いを込めるのは難しいと仰ったが、下句から思いは十分伝わってくる。「高齢の姉」が作者のお姉様なのかあるいは別な方なのか「兄」も同様で、その関係が筆者にはよく分からない。お姉様のお宅の庭に亡くなったお兄様が若いときに植えた梅の木があり、その花を見ながらお兄様の思い出話をされた時の歌である。

お兄様は寡黙だったが、大学生の時には箱根駅伝を走るほど元気な方だったとのこと。美しい梅の花を前に美しい思い出が語られた。

北条の剛たけし女子おなごを想はせて

梅花流るる鎌倉の春 成秋

上句と下句の意味的なつながりを読み取るのがやや難しいが、梅の花が散って鎌倉にも春が来たという意味の歌で、梅の花の凜として力強いイメージと北条政子を重ねているという解釈は表面的である。「梅花」とあるので「春」は不要ではないかと考えるのも間違っている。「春」がなければこの歌は成立しない。

この歌の「春」は時期を表すのではなく「春景色」という意味である。では鎌倉で春に見られる景色とはどういうものか。鎌倉は囲い女の街で、春になると男は若い女を求めて別宅に行き、妻は鬼になって怒る。作者は江戸小唄「春風がそよそよと」に言及された。

春風がそよそよと 福は内へと この宿へ

鬼は外へと 梅が香 添ゆる

雨か 雪か ままよ ままよ

今夜も明日の晩も 居続けしよ 生姜酒

この小唄のような情景を思い浮かべて詠まれた歌だとすれば、男は頼朝で鬼は政子である。女癖の悪い頼朝の浮気に政子が鬼のように怒る。「梅花流るる」とは政子が怒って梅の枝を引きちぎり梅の花がさあっと流れるように散るとも読める。ここまで読めば、想像は頼朝の浮気相手の亀の前や彼女のいた飯島邸を政子が襲撃させた事件にまで広がる。この歌はこのような鎌倉の歴史を詠んだ一首なのである。

「梅花流るる」の表現に、梅の花は桜のようにには散らないのではという意見がある。調べてみると、花がポロポロ落ちるので梅の花が散ることを「梅がこぼれる」と表現することもあるようだが、平安や鎌倉時代の和歌ではそのような言葉が使われたことはなく梅は「散る」となっている。鎌倉時代に思いをはせるこの歌の場合、「散る」ことを表現する「流るる」は適切な言葉といえる。さらにいえば、万葉集には大伴旅人の次の歌がある。

我が園に梅の花散るひさかたの

天より雪の流れ来るかも 大伴旅人

自分の庭に梅の花が散っているが、それは雪が流れてくるかのようにあるといった意味だろう。この歌でも梅が散るのを雪の流れるようにと喩えて「流れる」と表現している。

枕辺に『三浦うた紀行』最期まで

置きて逝きしと身内に聞けり 尚道

亡くなられた知人への悼歌である。ある短歌会で作者は故人と昔と一緒にだった。歌に出てくる『三浦うた紀行』とは作者の歌集である。自分の歌集を最期まで大切にしてくれていた。歌人としてこれ以上の喜びはない。

「いいことない?」「何もないのがいいことよ!」

青日の談斯く沁みる今 弘子

「青日」とは若い日のことで、若い時に退屈して交わした何気ない会話が、今では本当にその通りだと思えるという歌である。最近はニュースにしても、連絡にしても、何かあればたいはいはよくないことで、まさに「便りがないのは良い便り」になっている。「斯く沁みる」の「斯く」は「本当にこのように」という実感を表現された。上句は話し言葉でポップな若い感じを出し、下句は固めの言葉で重く落ち着いた感じにすることで、年齢を重ねたことを見事に表現している。

みちのくの海傾きて斃れける

かたぶ

たお

命のもとにも春は来るらむ 裕二

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災の犠牲者への鎮魂の歌。
東北に押し寄せた津波で亡くなった人たちのところにもきつと春はやって来ているだろうという意味である。「海傾きて」という言葉は、鴨長明の『方丈記』に出てくる言葉である。『方丈記』には、元暦二年（一一八五）に都を襲った大地震の描写があり、津波がどのように表現されている。当時まだ津波という言葉はなかったのだろう。日本は昔から繰り返す津波に襲われてきたことを表現したくて、二〇一一年の津波にその言葉を使った。また、結句「春は来るらむ」は文としては古文になるが、その意味するところを現代文の七文字で表現することができず、上句の津波を昔の言葉にして全体としてバランスをとったうえで、この言葉を選んだ。

春の野に若草色や心浮き

何とは当ての無き身なれども 満美子

最近はずっと暗いニュースが多く、ずっと待っていた春が来たのに気分は晴れない。ふと窓の外を見ると、きれいな若草色の春蘭が生えていて、それに心を奪われて嫌なことを忘れ、ロマンチックな気持ちになった。春だからといって、何かあるのかといえば、若ければあるかもしれないが、もう何があるわけでもない。しかしそれでも心は浮き立つもので、そのようなお気持ちを詠まれた。

春は毎年やって来るが、人生の「春」は一度過ぎればもうやって来ない。植物が芽吹いて生命力をみなぎらせる春は、この事実を包み隠し、今ここに自らが生きていることを実感させる。自然に抗わずその一部となって生きればよい。そう言っている歌だろう。

亡き夫と約束したる「湯楽の里」

うから
親族と連れたち朝風呂に入る 員子

「湯樂の里」は横須賀にある温泉施設で、作者は以前ご主人とお仕事でその前を通られたときに、一度入ってみたいと話していた。その温泉に行ったことを歌に詠まれた。ご主人も一緒にいらよかっただろうが、それが叶わなかったので歌になった。親族で朝風とは何とも微笑ましい光景である。名前の「湯樂」も歌の雰囲気合っている。

戻らずにじっと海見る鳥一羽

ああ、日が落ちる一緒に見ましょう 和子

作者は部屋から屋根に止まっている鳥をよくご覧になるそうで、不思議に思われるのはたくさんの鳥がみな山側ではなく海側を見て止まっていて、さらに夕暮れになると必ず一羽だけが残っていることである。なぜ海側を見ているのか、なぜ一羽だけが残っているのか、その理由はわからないが、鳥を見るのを日課のようにされていると、鳥が友達のように思えてこの歌が生まれた。

光景が目には浮かぶ歌である。落日もひとりでも寂しいけれど、誰かと一緒に見れば気分も違う。それがたとえ鳥であったとしても。「ああ」という言葉があることで情感が増している。

一ツずつ重荷下しつ黄昏の

時を歩みて父母の影みゆ 艶子

ご主人を亡くされて四年目に。本当ならご主人の顔を思い浮かべなければならぬでしょうけど、と作者は仰った。なぜか夫よりも両親のことを思う。作者だけでなく、連れ合いを亡くされた方は同様だろう。「血は水よりも濃し」という言葉がある。漁師のご主人を漁の事故で亡くされた方が

詠まれた歌に、主人は亡くなるときに、果たして妻である自分のことを思ったのか、それとも母親のことを思ったのかというのがありと教わった。その作者はきっと自分ではなく母親だったと思ったので歌を詠まれたのだろう。

外出のままにならない家猫は

くしゃみ激しき抱きて歩めば 良江

家の中で飼っている猫を外に連れて行ったら、くしゃみをしたという歌である。実際の出来事を詠まれたのかもしれない。犬ではなく猫であるのが面白いと思えるのは、猫はわがままで気まぐれなイメージだからだろう。くしゃみが激しいとなれば、犬や猫にも花粉症はあるようなので、花粉症に違いない。マスクもできないし、人間よりも大変なのは。

十二 先の見えない世界に

星のふる観覧車で吹く早春賦

オカリナ聴きし友も逝きたり 由良子

作者は以前オカリナに夢中になった時期があり、いつでも持ち歩いて時間があるとオカリナを吹いていた。ある時ご友人とご一緒に出かけられ、帰りが遅くなった際に、ご記憶ではお台場だそうだが、観覧車の中で皆さんとの思い出に早春賦を吹いた。そのオカリナを聴いてくれたご友人ももう二人も亡くなってしまい、作者自身も今ではオカリナを吹くこともなくなってしまった。

一人旅初体験の孫待てば

駅降り立ちて手をふり笑顔 光枝

お孫さんが春休みに遊びに来られたことを詠まれた歌。いつもご両親の車で来られていたお孫さんが、初めて一人で電車を乗り継いでやって来るため、心配してドキドキされたが、お孫さんは車中で風景の動画撮影を楽しまれ、まったく平気だったとのことである。上句から作者の、下句からお孫さんの気持ちや様子が伝わってくる。

芳春の喜びさへも消し去りぬ

異国の街に砲弾の雨 裕二

「芳春」とは花ざかりの春のことである。ロシア軍による侵攻でウクライナの街が破壊され、多くの犠牲者が出ている。筆者はこの歌を詠むに当たって、まずウクライナのことを考えたが、過去から現在に至るまで戦争

が起きればいつでも同じく悲惨な状況になるという思いから固有名詞は使わなかった。

在りし日にそつと作りし品々よ

何処いずこに消ゆるこの身の後は 弘子

作者はものを作るのが好きで、縫い物をしたり木像を作ったりいろいろされている。「そつと」という言葉によって、誰に見せるのでもなく丁寧に一生懸命心を込めて作っていることが表現される。自分が作ったものや大切にしているものも、他人にとっては何てことのないものであり、自分が亡くなったらそれらはどうなってしまうのだろうかと思われ、どこか寂しい気持ちで詠まれた歌である。

母の時代に戻りて

香かの便り受くるも苦界ぞ包みたる

蕾つぼみの梅が枝咲かせと乞うや 成秋

「香の便り」とは色里から来た香水のにおいのする手紙で、夫が居ないときにそれを受けて開けた妻も色里ではないがやはり苦界である。「梅が枝」は梶原源太景時の長男景季かげすえの側女が遊女として名乗った源氏名で、彼女が体を売ったお金で景季が戦に出るための鎧などの武具を揃えたという話がある。下句は、貢いで支えているのは他でもない私だと梅が枝が正妻に対して主張していると読める。作者によれば、このような痴話喧嘩は戦中や戦後には何度もあり、作者のお母様も辛い経験をされたとのことで、詞書きにあるように、この歌はお母様の気持ちになって詠まれたものである。

立つ瀬なき我が身の上の苦しきに

春の宵なる月を眺むる 満美子

作者ご自身を見つめられた歌であろう。上句の苦しい状況に対し、下句の美しい春宵の情景。「春宵一刻値千金」という言葉もあるように、春の宵は趣があつて素晴らしい。初句の「立つ瀬」という言葉で意識や視線が足元の下方に向くが、結句「月を眺むる」では一気に上を向く。おそらく心の動きも表しているであろう。

「員^{いん}」の字を「かず」と読む人増えしかも

大河ドラマの比企能員見て 員子

ご自身のお名前を「かずこ」と読んでもらえたことがなく、高校の歴史の授業で武將の比企能員の名前を初めて見たときに、自分の名前があると思われた。現在放送されている大河ドラマに比企能員が登場し、とてもうれしくなつてこの歌を詠まれた。

シベリアに送られ戻りし人の短歌^{うた}

再び読めりロシアの戦争 尚道

作者のご両親の世代はみな戦争体験者で、お知り合いには実際にシベリアで抑留された方もおられる。その世代にはシベリア抑留体験を歌にされた人たちがおられ、その歌を読むとロシアの行動は昔も今も変わらない気がしたとのことである。

安定剤心も体も支配して

ほんとの自分はどこにいるのと 和子

目を手術され、術後に安定剤を飲まれて、薬で身体は動かず、意識も朦朧としてままならない状態を下句でうまく表現している。

春浅く夕日輝き波寄せて

鷗鳴くなよ、過ぎし日うつつ 艶子

結句「過ぎし日うつつ」は「過ぎ去った日が現実となる」といった意味だろうか。そうだとすると、夕日が沈む美しい海の風景と結句がどのようにつながるのか。作者にしか分からない何かを表現しているのだろうか。

十三 桜の花もうつろひて

花終へて赤く色づくさくらんぼ

鳥ついばめば種散乱す 光枝

本作の「さくらんぼ」とは山桜とか吉野桜の実のことで、この歌を詠んだ時期はその実を鳥が食べて種を落としていくため、洗濯物を干すのに注意されている。世の中は変わっても自然の営みは変わらず、時が来れば花は咲くし、鳥も飛び交う。そんなお気持ちで詠まれた歌である。

フロントに花びら四、五片はりついて

病院帰りのわれを迎へり 由良子

耳が痛くなり心配になって病院に行つて診てもらうと、とくに何でもなかった。医師によると、耳掃除をしすぎるとよくないとのこと。ホツとして帰ってきたら車のフロントガラスに桜の花びらが張り付いていた。もしかすると行きにも付いていたのかもしれないが、気にする余裕はなく、帰ってきてはじめて気がついた。その花びらに心が癒やされたとのことで、安堵されたお気持ちを詠まれた。四、五片という数が絶妙である。

春よ春 驕れる心はち切れて

上京せしは十八の春 艶子

作者はむかし松竹歌劇団（SKD）のメンバーだったので、オーディションに合格して上京された時のことを詠まれたのだろうか。「驕れる心」とあるが、作者のご友人によれば「三浦のような田舎からSKDのメンバーに選ばれて花の東京に行くのはすごいことで、当然自信に溢れ、選ばれし

者という気持ちになったのだろう」と。今振り返ると当時のご自身は何故に驕っていたと思われたのだろうか。「春」が三度も使われて、作者の当時喜びに満ちた様子が伝わってくる。

喪中なる我も明るきマニキュアを

つけて歩めば足取り軽し 員子

作者は旦那様を亡くされて半年が経った。暗く沈む心を明るくもっていかうと明るいマニキュアをし、明るい色の服を着たりされている。愛する人を失うとすぐには実感がわかなくても、やがて悲嘆の感情が生まれる。それぞれが自分なりに乗り越えてゆかなくてはならない。短歌を詠むことも自分を客観視することになり、その一助になる。

初孫の初給料のお誘いは

大好物のあんかけうどん 弘子

一読しただけで作者のうれしさが伝わってくる。子供が初任給で親に何かをするというのはよく聞くが、孫となれば喜びもひとしおである。作者は行きつけのお店のあんかけうどんが大好きで、そのことをお孫さんは覚えておられて、初任給が出た際に行こうと誘ってくれた。高価で気取ったものではなく庶民的な「あんかけうどん」というのが微笑ましく、読者も幸せに包まれる歌である。

汝が庵は仮寝の宿よと天の声

ふすま

ぬく

されど衾はやはらか温きぞ 成秋

「天の声」とはもうひとりの自分の声であり、いま毎日寝ている温かい布団は仮住まいに過ぎず、いずれ長い眠りにつくのは冷たい場所だとささやく。このような気持ちになるのは、作者が体が弱かったために子供の頃からいつも死を意識していたことやご両親を案じながら自分の生きる場所を求めて故郷を後にしたことがあるからで、心地よく暮らす現在の地にあっても「汝が庵は仮寝の宿」と思えてくる。文学の道を歩む者の心は、安住することのない永遠の旅人のようなものなのかもしれない。

見つめたるわれの視線を感じてや

雲に隠れし春の夜の月 裕二

仕事の帰りなどに夜空を見上げると晴れた日には星や月が見える。星は変わらないが、月は見るときに「表情」を変える。悲しそうときもあれば、力強く見えるときもある。先日気持ちが沈んでいたときに見上げた月は優しげで美しかったが、しばらく見ていると雲に隠れてしまった。まるで見つめられて恥ずかしくなったかのようなのであった。その夜の月を思い出して詠んだ歌である。

かきつばたいけはた

杜若池端に立つ人影の

業平に似て憂いを誘う 満美子

作者が根津美術館で開催された特別展「燕子花図屏風の茶会」に行かれて経験されたことを詠まれた。かきつばたの咲く頃になると、『伊勢物語』の主人公とされる在原業平のことを思われると、有名な尾形光琳の燕子花図屏風を観た後に、美術館の庭園を散策すると、池のほとりに実際にかきつばたが咲いていた。そこにひとりの男性が立っていた。その光景が三河の国の八橋で美しく咲くかきつばたを見て「かきつばた」の歌を詠んだ業平を想像させた。

「かきつばた」の歌とは、句頭に「かきつばた」を置いた業平の次の望郷の歌である。

唐衣きつつなれにしつましあれば

はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ 業平

誰も来ぬ一日なれど裏山に

来たる狸を猫に教はる 尚道

実際のことを詠まれたのだとすれば、狸は夜行性なので、誰の訪問もなく一日が終わろうとしていたところに狸がやって来た。狸は日本の昔話や民話では人を化かす動物として登場する。近年は、農作物を荒らす招かれざる客としてあまり歓迎されていないようであるが、筆者などは見かけるのが実物の狸ではなく、信楽焼のたぬきの置物ばかりなので、狸に対して勝手にひょうきんでプラスなイメージを抱いてしまう。猫は警戒心から狸の登場を嫌がったのかもしれないが、作者は狸であつても来てくれたことにどこかうれしい気持ちになったのではないか。

ビートルズ流して飛ばした第三京浜

あの頃のわたし何着てたつけ 和子

最近目の具合が悪くて手術をされたりして、あまりよいこともなく歌が考えられなかったときに、なぜかふつと浮かんできた歌である。どうしてこの歌なのかわからないが、ただ、若いときのことはよく思い出される。流れていた曲も周りの風景もはっきり覚えているのに、自分のことだけは覚えていない。ご自身は洋服が好きなのに、なぜかその時着ていた服も思い出せない。歌謡曲の歌詞になりそうな上句は思いつきそうだが、下句は作者ならではの表現である。

十四 思ひ出はいつも鮮やか

戻らねば我が物顔のどくだみが

君の小径を占拠するかも 弘子

ご友人でご自宅の庭にある花の小径を大切にされていた方が、急に引越さなければなくなり、作者がそこを管理することになった。しばらくして行ってみると、その小径はどくだみで埋め尽くされていた。人が居なくなると、たちまちこのようになってしまう。戻りたくても戻れないご友人の心情や、さらにフクシマや現在戦争中のウクライナの人たちのことも考えてしまった。事情があるのだから仕方がない。でも、早くしないと「どくだみ」に乗っ取られてしまう。そんなお気持ちから「占拠」という言葉が使われた。

お祭りも海も花火もみな中止

夏のたのしみなき三年目 光枝

三崎のことを詠まれたが、日本全国で皆が同じ経験をしている。夏の風物詩とも言える「祭り」「海」「花火」の三つは、もう三年も中止になっている。毎年夏に感染者が増えている事実を考えると、この先もできないのではないかとさえ思えてくる。中止が続けば、それが常態化して再開が難しくはならないだろうか。厳しい夏の暑さに耐えられるのも楽しいことがあってこそ。味気ない夏はいつまで続くのだろう。コロナ禍の人々の気持ちを代弁した歌である。

螢火の小川の岸に立つ父母の

着物も帯もいづこに去るや 成秋

かつては蛍も身近で見られ、歌のように家族で蛍狩りというのも珍しくなかっただろう。作者は蛍狩りでご両親がお召しになっていた着物を今でもはっきり覚えておられるが、それらはどこへ行ってしまったのだろうかと思われ、この歌を詠まれた。結局残るのは記憶の中だけ。場所が「小川の岸」になっているのは、下駄履きで来たお父様が、渡った小川の先で蛇を踏まれたという思い出があるからである。漱石の俳句「蛍狩われを小川に落としけり」を思い出した。

胆管癌三十三年目で完治したと

でんわの老友声 トーン高し 由良子

高校来のご友人より電話があり、病院に行ったら「癌は完治したのでもう通院しなくてもよい」と医師に言われたとのことだった。不安の日々から解放されたかのように、それを伝える彼女の声はトーンが高く歌うようで、本当に良かったと思われる、彼女の報告を歌にされた。三十三年とは相当長い期間であるが、「三」は「みつ」の語呂合わせで「満たされる」や「願いがかなう」という意味になり縁起がよい数字であるところまで聞いた。三十三年、偶然だろうか。

現人^{うつせみ}はいつか散りぬる宿命^さなれど

千紫万紅けふも咲きたり 裕二

「現人」とは字の通り「現在生きている人」という意味である。この世に生きている身体を表す「現し身」としなかったのは、肉体は滅んでも魂は残るといふようなニュアンスを加えなくなかったからである。この歌は、人は等しくいつかは死ぬがその人生は様々であると述べたもので、武者小

路実篤の言葉「人見るもよし、人見ざるもよし、されど我は咲くなり」ではないが、人生を「花」に喩えたものである。

二年経ち又脊が伸びたか若き人

吾優先席に埋もれてゆく 和子

新型コロナウイルス拡大のために長く遠くに出かけられなかったが、約二年ぶりに電車に乗ると、誰もが以前より気持ちに余裕がなくなっていると感じられた。そのような世の中で若者はさらに大きくなるが、自分はどうすることもできずにただ埋もれてゆくしかないのかと思われた。その悲しみを詠まれた歌である。

糖尿の祖母への土産は「白い恋人」

一日一個の制限つきで 員子

「祖母」とは作者ご自身のことで実体験を詠まれた。糖尿病では甘い物はもちろん塩分や水分も制限しなくてはならない。北海道土産であれば、他に甘くない物もありそうだが、一日一個としてまでも祖母に大定番の「白い恋人」をあげたかったお孫さんの気持ちは何とも微笑ましい。とても楽しい旅行だったので、きっとその楽しさもあげたかったのである。

にいぼたる

新蛍独り飛びたる夏の宵

虚空に向かい心預ける 満美子

幻想的な光を放ちながら一匹の蛍がゆっくりと宙を舞う光景が浮かぶ上句に、作者が独り何もない空を見て心を預けようという気持ちを表す下句。どこか儚く寂しさを漂わせる一匹の蛍に自らを重ね合わせる。蛍のように

自分も輝きたいと願いながら消せない寂しさを抱えて生きてゆこうという作者の思いが読み取れる。心に余韻を残す歌である。

裏山の枇杷は豊作 忘れてた

「揺籃ゆりかごのうた」声出して歌う 尚道

枇杷の実がたくさんなっているのを見て、枇杷は何かの歌に出てくるのではないかと考えたなら、童謡「揺籃のうた」の二番の歌詞に「枇杷の実」があったのを思い出した。歌を思い出すために声に出して歌ってみた。その時のことを詠った歌である。調べてみると「揺籃のうた」を作詞したのは北原白秋である。

恋しくて傘にかくれて泣きました

疎開なるもの御存知ですか 艶子

作者は七歳の時に二、三ヶ月間お姉様と二人で親戚の家に疎開された経験がある。今も雨が降るとその時のことを思い出され、歌にある恋しがつている人とはご両親である。終戦となり、お父様が疎開先のお二人を迎えに来られた時には、足音を聞いただけでお父様だとわかったそうである。

作者は「疎開」を知らない若い世代の人たちに話しかけるつもりで、ご自身では初めて短歌で口語表現を用いられた。その手法は見事に成功している。

この歌の下句は問いかける形になっているので、それを聞く若者の存在が示される。そのため、上句と下句は戦時中の若者と現在の若者という対照をなすが、疎開経験を持ち出すことで両者の間に七十年以上の時間の隔たりを作り、「疎開」について問うことでそれを埋めて両者をつなぐ。素晴らしい歌である。

参考主要文献

- 上田三四二『短歌一生 物に到るところ』講談社学術文庫 一九八七
- 岡井隆監修『岩波現代短歌辞典』岩波書店 一九九九
- 佐佐木信綱『万葉集事典』平凡社 一九八〇
- 佐佐木幸綱他編『日本歌語事典』大修館書店 一九九四
- 佐竹昭広他編『新日本古典文学大系一 萬葉集一』岩波書店 一九九九
- 『新日本古典文学大系二 萬葉集二』岩波書店 二〇〇〇
- 『新日本古典文学大系三 萬葉集三』岩波書店 二〇〇二
- 『新日本古典文学大系四 萬葉集四』岩波書店 二〇〇三
- 『新日本古典文学大系五 古今和歌集』岩波書店 一九八九
- 『新日本古典文学大系三九 方丈記・徒然草』岩波書店 一九八九
- 「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観』全十巻 角川書店 一九八三―一九九二他。

歌人各論は省略。

日本浪漫学会

最高顧問	井村君江	明星大学名誉教授
名誉顧問	鈴木孝夫	慶応大学名誉教授
会長宗匠理事長	濱野成秋	日本女子大・京都外大大学院教授歴
副会長	河内裕二	大学講師。アメリカ研究専攻
東京地区常任理事	和泉元彌	和泉流狂言宗家
関西地区担当理事	福田京一	同志社女子大学名誉教授
九州地区担当理事	市川邦康	久留米大学名誉教授
東北地区常任理事	伊達雅彦	尚美学園大学教授
特任教授	若松宗雄	元ソニーミュージック社長
特任教授	和泉元彌	舞台芸術